

マイモニデスにおける神への道程

——『迷える者の道案内』Ⅲ：51より——

神 田 愛 子

はじめに

中世の代表的思想家の一人であるマイモニデス (Moses Maimonides; ユダヤ名 Moshe ben Maimon, 通称 Rambam, 1135-1204)¹⁾は、思想史においては哲学者、タルムード註解者、法学者と見なされているが、医者、天文学者でもあり、合理的思弁家としてではなく、ユダヤ教のラビとして当時のユダヤ人社会を指導した²⁾。主著『迷える者の道案内』(アラビア語：*Dalālat al-ḥā'irīn*, ヘブライ語：*Moreh nebhukhim*, ラテン語：*Dux neutrorum*)³⁾は、ユダヤ・アラビア語⁴⁾で書かれたが、彼の生前にイブン・ティボン (Ibn Tibbon) によりヘブライ語に翻訳された後、ハリジ (al-Harizi) のヘブライ語訳からラテン語に翻訳され、ユダヤ人思想家だけでなくイスラームやキリスト教の神学者や思想家にも影響を与えた。本書は愛弟子のユダの子ヨセフに宛て書かれたものであるが、ヨセフと同様、啓示と哲学の二つの真理の間で迷い、導きを必要としている人が読者として

1) マイモニデスはスペイン・アンダルス地方のコルドバ出身で、代々ユダヤ教ラビの家系である。当時この地域はムワッヒド朝 (1130-1269) の支配下にあり、迫害を逃れるため一家はアンダルス南部と北アフリカを流転、モロッコのフェズを経てカイロ旧市街フスタートに定住した。

2) マイモニデスの著作には、ユダヤ律法に関するものに『ミシュナー註解』(*Pirush ha-mishnayot*)、『戒律の書』(*Sefer ha-mitsvot*)、『ミシュネー・トーラー』(*Mishneh Torah*) が、哲学・思想の書として『迷える者の道案内』、『論理学』(*Maqāla fī šin'at al-manṭiq*) が、また天文学、医学、薬学、衛生学に関するものがある。

3) 1963年にS.ピネスによる英訳が出版されて以来、欧米では80年代後半以降彼の思想に関する論文が数多く出版され、マイモニデス研究は急速に進展した。

4) ヘブライ文字を使ったアラビア語。七世紀のイスラーム王朝成立以降、中東・北アフリカに広まった。ブラウによると、ユダヤ人が新しいアラビア語を使い始めたのは七世紀に遡るが、九世紀より前の著作は残存していないという。(J. Blau. (1988). *Studies in Middle Arabic and its Judaeo-Arabic Variety*. Jerusalem: Magnes Press, p. 86.)

想定されている。全体として、彼は律法の真の意味を知ることの重要性を謳っており、そのため人間には啓示を信じることと理性を用いることの両方が必要であると説いている。彼の思想は、中世哲学において重要な位置を占めるアリストテレス主義や新プラトン主義といった古典ギリシア思想や、イスラームのカラーム（神学）や哲学から大きく影響を受けているとはいえ、基本的にはタナハ（聖書）とタルムードを中心としたラビ・ユダヤ教の伝統に基盤を置いており、中世におけるイスラームとキリスト教との関係を探る意味でも重要な人物であるといえよう。

『迷える者の道案内』は三部構成になっており、主に第一部では神と人に関わる聖書語句の解釈、第二部では神の存在証明と預言の問題、第三部では神の摂理と人間の応答について書かれている。ただし、各部と章には見出しがなく、必ずしも明確にテーマ別に分けて書かれているわけではない。本論では、譬えにより示された、人間が神との完全な関係に至るまでの道程をテキストに即して解釈し、その上で人間に必要とされる神への「知」と神への「愛」の関係を論じ、さらに、ユダヤ・アラビア語原典中のヘブライ語の語句と聖書とタルムードの引用箇所を分析をとおして、彼がユダヤ伝統に即して弟子に託した神への道程に関する教えの真髄を捉えることを目指す。

1 マイモニデスの譬えに見る、神と人間の完全な関係

『迷える者の道案内』第三部五十一章⁵⁾は、本書における結びとも言える箇所である。マイモニデスは次の譬えから話を始める。

「王 (sulṭān) は宮殿 (qaṣr) の中にいる。王に服従する民 (ahl) の一部は都 (madīna) の中におり、一部は都の外にいる。都の中にいる者のうち、ある者は顔を他の道に向けながら王の館 (dār) に背を向ける。あ

5) 邦訳は Moshe ben Maimon. ed. S. Munk. (1930). *Dalālat al-ḥā'irīn*. Yerushalaim: Defus Azriel, pp. 454-463 (ユダヤ・アラビア語校訂版、以下 *Dalāla* と表記) を底本とし、Mūsā ibn Maymūn. ed. and translit. H. Ātāy. *Dalālat al-ḥā'irīn*. al-Qāhira: Maktabat al-Thaqāfa al-Dīniya, pp. 714-728 (アラビア語字訳版) と、Moses Maimonides. trans. S. Pines. (1963). *The Guide of the Perplexed*. Chicago and London: the University of Chicago Press, pp. 618-628; Moses Maimonides. trans. M. Friedländer. ([1904] 1956). *The Guide for the Perplexed*. New York: Dover Publications, pp. 384-391 を参考にした私訳である。なお、ケルナーは、伝統的に最後の四章 (Ⅲ:51-54) は一単元と見なされ、第五十一章は実践を強調した純粋に宗教的目的をもった章であると述べている。(M. Kellner. (1990). *Maimonides on Human Perfection*. Atlanta: Scholars Press, p. 13.)

る者は王の館を目指してそれに顔を向け、王の館に入り御前に立つことを望むが、館の壁を見たこともない。ある者は館を目指して到着し、その周りを廻りながら門を探す。ある者は門から館に入り、回廊 (dahāliz) の中を歩く。またある者は内庭 (qā'at al-dār) に入り、王と共に同じ場所にいる。しかし、館に入ることで王を見ることにも王と話をすることにもならない。その者には更なる努力が必要となるのであり、その後には遠くからまた近くから王に謁見し、王の話を聞きまた話すようになる⁶⁾。]

1-1 神と人間の完全な関係に至る各段階に即した譬え話の解釈

続いて彼は、譬え話の解釈を神と人間の関係の各段階に即して述べる(図1参照)⁷⁾。第一段階は、都の外に住む者⁸⁾で、いかなる学派の信条 ('aqīda) も持たず、理性 (nāṭiq) のない動物の範疇 (ḥukm) にいるような者である。第二段階は、都の中に住む者の内、王の館に背を向けた者で、彼らは誤った考え (ra'y) を持つため王の館から次第に離れていき、第一段階よりも更に悪い状態になる。第三段階は、王の館に入ることを願うがまだ館を見たことがない者で、彼らは法 (sharī'a) の下にある一般民衆 (jumhūr) で、戒律を遵守する無学な者 (עמי הארץ: 'amei ha-arets)⁹⁾である。第四段階は、館の周りを歩く者で、彼らは法学者 (fuqahā')¹⁰⁾として

6) *Dalāla*, pp. 454-455. マゴネットによると、ユダヤ教における礼拝は神殿への参詣と解され、個人祈祷により自らを整えた後、共同体の祈りで正式な礼拝が始まり、シエマーの祈り、立祷 (אמידה: amidah)、トラー朗読、終祷により礼拝の中心部分が構成されるといふ。(J. Magonet. (2011). 'Jewish Liturgy'. An Overview of Innovations in Jewish Liturgy in the Recent Period as Reflecting Contemporary Jewish Concerns. Kyoto: Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions (CISMOR) Workshop of Doshisha University, May 28, 2011.)

7) サミュエルソンは、都の外に住む者を「人間以下」(subhuman) に分類している。(N. M. Samuelson. (2003). *Jewish Philosophy: An Historical Introduction*. London and New York: Continuum, p. 222.) エゼキエル書には、神殿の外庭には民が住み、内庭には拝殿と祭壇が置かれると書かれている。

8) 補足的に「例えば、北のはずれに住むトルコ人や南のはずれに住むスーダン人の諸部族、またこれらの気候帯において我々と共にいる彼らと似た者たち」、「人間の位より下で猿の位より上にいる被造物」と書かれている。

9) 字義通りには「地の民」であるが、*Encyclopaedia Judaica*によると、ユダヤ伝統においては無学な者を差す。なお、マイモニデスはユダヤ・アラビア語の原典の中で、ヘブライの表現にはヘブライ語を用いている。詳しくは本論第三項参照。

10) イブン・ティボンは「タルムード学者 (talmudiyim)」と翻訳している。(H. A. Davidson. (2005). *Moses Maimonides: The Man and His Works*. New York: Oxford University Press, p. 385.)

正しい考えは持つが宗教の基礎 (uṣūl al-dīn)¹¹⁾ について思索 (naẓar) しない者である。第五段階は回廊に入り、宗教の基礎の思索に身を投じた者で、そこには確かに複数の異なる段階がある。

次に彼は、学問の理解と関連させつつ上記の譬え話の解釈に解説を加える。まず、数学 (ilm al-riyāḍiyyāt) と論理学 (ṣinā'at al-manṭiq) を学ぶ者は第四段階にある者で、王の館の周りを歩く者 (法学者) と同じである。自然学 (ṭabī'a) を理解した者は第五段階に進み、王の館の回廊を歩く¹²⁾。さらに形而上学 (ilāhiyyāt) を理解した者は王の内庭 (החצר הפנימית) he-ḥaṭser ha-pnimit¹³⁾ に入り、第六段階の学者の段階 (darajat al-'ulamā) に到達するが、彼らはまだ完全さとは違う段階にいる。形而上学を完全に理解し、神以外のものを放棄し、全てを神に向けた者は御前会議 (majlis al-sulṭān) にいる者となる。これが最後の預言者の段階 (darajat al-anbiyā') である¹⁴⁾。

1-2 最終段階に至るための必要事項

館に入った後、最後の神に謁見する段階に到達するために必要な事柄につき、マイモニデスは以下のように論じている。第一に、神に完全に専念 (inqitā') し、神に近づく努力をし、神との絆 (wuṣla), すなわち知性 ('aql) を強めることが必要であると言う。神との絆とは、神から流出する (fāḍa) 知性に拠って生じるものであるが、彼は「知れ、主こそ神であると¹⁵⁾」(詩編 100:3) という聖書の言葉を引用し、神との絆を強めるためには、まず知性を働かせて神を知ることが必要であると述べている。第二に、神を知解した後、愛を持ち、心から神を礼拝しなければならないと言う。彼は「主を愛し、心を尽くし、魂を尽くして仕えよ」(申命記 11:13) という律法の書の言葉を引用し、「主を愛し」については「愛は知解

11) イスラーム思想の文脈においては、通常は神学と訳す。

12) 伝統的に、法学者より自然学者の方が高い段階にあることが問題視された。シェム・トーフ (Joseph ben Shem Tov ibn Shem Tov, d.1480) は「多くのラビは、マイモニデスはこの章を書いていないか、書いたとしたら隠すか燃やすべきだと述べた。…自然学や形而上学を学ぶ者がトラーの学習に専念する者より高い段階にいるとは！」と論じ、ファラケラ (Falaquera, d.1290) は「この地の聖なる人々は学問を習得することなく完全さに達する」と述べた。(M. Kellner, *op. cit.*, pp. 15-16.)

13) エゼキエル 44:21, 27.

14) *Dalāla*, pp. 455-456.

15) 以下、聖書の引用は新共同訳による。

の度合いによる (al-maḥabba ‘alā qadr al-idrāk)¹⁶⁾と語り、神を知ることと愛することは相関関係にあり、単に想像 (khayāl) によるのではなく、まず初めに知性により神を理解した上で、愛をもって神を礼拝することが大事であると説く。さらに「心を尽くし」については、タルムードの「これこそが心による礼拝である¹⁷⁾」という言葉を用いし、神に対する知解と愛の上に心を尽くした神への崇拜 (‘ibāda) が形成されると論じる。これはダビデが「わが子ソロモンよ、この父の神を認め、(全き心と喜びの魂をもって) その神に仕えよ¹⁸⁾」(歴代誌上 28:9) と命じたことである。そして第三に、常に神に思考を向けることが大事であると言う。神との絆はたとえ形而上学 (‘ilm al-ilāhī) の真理 (ḥaqīqa) を知ったとしても、生活の必要にかまけて神に対する思考 (fikra) を空にしていたら断ち切られるのであり、このため「あなたがたの知覚から神を遠ざけてはならない¹⁹⁾」と論じている。このことは全ての礼拝行為についても同様に言えることであり、単に唇を動かして祈ることや、読んでいる事柄について考えることなくトーラーを朗読することは、預言書に「口先ではあなたに近く、腹ではあなたから遠い」(エレミヤ 12:2) と書かれている状態に近い、とマイモニデスは説くのである²⁰⁾。

1-3 究極の目標に向けての実践訓練

続いて彼は、神の御前に進み出るという究極の目標 (ghāya) に到達するための訓練 (riyāḍa) について指導 (irshād) を始める。第一に、シェマー (שמע: shema’) の祈り²¹⁾を唱える時には、シェマーの最初の節に集中 (חֲבָנָה: khavanah)²²⁾しただけで満足せず、あらゆる雑念を取り払って祈らねばならないと彼は言う。第二に、長年に亘りこのことが実行できた時、

16) ミシュネー・トーラーのヒルホット・テシュバー (悔恨の法) 10:6 には「その人の愛はその人の知識と一致する」とある。(D. Bakan, D. Merkur, and D. S. Weiss. (2009). *Maimonides' Cure of Souls: Medieval Precursor of Psychoanalysis*. Albany: State University of New York Press, p. 27.)

17) B.T. Taanith, 2a. 'ו עבודה שכל'

18) カッコ内はマイモニデスの引用にはない。

19) B.T. Shabbath, 149a. 'אל תקפו אל מדעתכם'

20) *Dalāla*, pp. 456-458.

21) 申命記 6:4 「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」を中心に、朝と晩の二回、神の唯一性を唱える祈りのこと。申命記 6:4-9, 申命記 11:13-21, 民数記 15:37-41 により構成される。

22) ムンクの校訂版には母音記号が付加されている。

まずトーラーを読む時も聞く時も常に思考をその熟考 (i'tibār) に向け、次にトーラー以外の書を読む時や祝祷 (ברכות: berakhot) を唱える時にも思考を常に解放し、その意味を熟考しなさいと彼は命じる。この崇拝行為においてこの世の事柄 (umūr al-dunyā) から思考が解放された後で家庭や身体に関わる生活に必要な事柄についての思考に携わるならば、これらのことを思考する多くの時間を与えようと彼は言う。一方、第三に、律法で命じられたことを行う際はその行為に思考を集中させ、一人の時や床の上で目覚めている時には、その貴重な時間を神の御前における (muthūl bayna yaday-hi) 知的崇拝 (al-ibāda al-'aqliya) に用いなければならない²³⁾と彼は言う。これが知識の人 (ahl al-'ilm) が訓練により精神 (nafs) を相応しく整えることで到達可能な目標であると、マイモニデスは論じる。

さらに、これらの人の中には、人々と話をし、身体は必要なことに拘らいつつ知性は神に向いている、「眠っていてもわたしの心は目覚めていました。恋しい人の声がある、戸をたたいています」(雅歌 5:2) と詠われる状態が可能になる者もいると彼は言う。これは我らの師モーセ (שה רבנו מ: Moshe rabe-nu) の段階であり、「モーセだけは主に近づくことができる。その他の者は近づいてはならない」(出エジプト 24:2) とあるとおり、モーセだけの特別な段階である。また「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主…これこそ、とこしえにわたしの名」(出エジプト 3:15) と聖書テキストが示すように、神への近さの点では父祖 (אבות: avot) の段階でもある。彼らの知性は常に神にあるため、たとえ牧畜や農業に勤しんでいようとも、彼らは神の傍らで完全さの極みにあり、神の配慮 (ināyat allāh) は永続的に彼らと共にある。彼らの目指すことは、神を深く知り神を崇拝する信仰共同体 (milla) をもたらすことであり、これは「なぜなら私は彼 (アブラハム) を知っており、それは彼が命令するためである²⁴⁾」(創世記 18:19) とあるように、神が望むことである。また、彼らの究極の目標は、全地に神の名が唯一絶対であること (יחוד השם בעולם: yihūd ha-shem ba-'olam) を広めることであり、神を愛するよう人々を導くことにある。ただし、この段階は私ごときが到達の指導を望める段階ではない、とマイモニデスは言う。とはいうものの、聖書に「お前たちの悪

23) I:50 の引用「横たわるときも自らの心と語り、そして沈黙に入れ」(詩編 4:5 を参照。)

24) 私訳。'כי ידעתיו למען אשר יצוה' (原文)

が神とお前たちの間を隔て」(イザヤ 59:2)と書かれている、我々と神を引き離そうとする障害 ('awāiq) を前述の訓練をとおして神が取り除いて下さるよう、我々は願ひ求めるべきであると、マイモニデスは論じている²⁵⁾。

2 神に近付くために必要な神への「知」と「愛」、その隔てとなるもの

2-1 神についての「知」と神に対する「愛」の関係

ゲルマンは、マイモニデスの著作には読者が「神(の裁き)への恐れ」から「神への愛」に向かうよう教える企図があり、このため自然学や形而上学を含んだ哲学的学びを通して神の完全さを知り無私の崇拝を行うことと、そうした崇拝に基づき愛により神と結びつくという究極の目標を自らの責任において選び取ることの、二つの行路(track)を想定していると論じている²⁶⁾。この神に近付き、神と結びつくために必要な神についての「知」と神に対する「愛」の関係について、マイモニデスは「彼はわたしを慕う者だから彼を災いから逃れさせよう。わたしの名を知る者だから、彼を高く上げよう²⁷⁾」(詩編 91:14)という詩編の言葉を引用し、神に近付くためには神を渴望する(קִשָּׁה: ḥoshak)ことと、神を知る(יָדַע: yoda 'a)ことの両方が必要であると述べている。彼はヘブライ語の אוהב (oheb: 愛する人)と חוֹשֵׁק (ḥoshak: 熱望する人)の違いを、「愛する者以外のものに思いを残さないまでの過剰な愛 (ifrāṭ al-maḥabba) が熱望 ('ishq)である」とアラビア語で説明し、神に対しては他のことには目をくれず、神だけを追い求める、愛する対象に対する一途で激しい姿勢が求められると言う。

また、知性における熱情は肉体の弱さに比例して強くなるとマイモニデスは論じる。肉体が弱まるにつれ知性 ('aql)は強められ、知解 (idrāk)は整えられるからである。彼はこう述べている。「年老いて死が近付いた時、その人の知解は増し、魂 (nafs)が肉体 (jasad)から離れる時まで、その知解とその対象に対する熱望 ('ishq li-l-mudrak)により無上の喜び (ghibṭa)が広がっていく。」さらに、彼はタルムードの「モーセとアロン

25) *Dalāla*, pp. 458-460.

26) J. I. Gellman. (1991). 'The Love of God in Maimonides' Religious Philosophy.' in J. P. Rosal ed. *Sobre la Vida y Obra de Maimonides: I Congreso Internacional (Cordoba, 1985)*. Cordoba: Ediciones el Almendro, pp. 219-221.

27) תַּשֵּׁבַח, תַּפְלִיטָהוּ אֲשֶׁקְבֹהוּ כִּי יָדַע שְׁמִי' (原文。下線部は筆者。)

とミリアムの三人はキスで死んだ²⁸⁾」の言葉を引用し、「キス (נשיקה: ne-shikah)」とは神への愛の激しさのことであり、「神への熱望から来るその知解の歓喜 (ladhdha) の内に」三人は天寿を全うしたのだと語っている。すなわち、知性により神を理解した上で、神を熱望し、神に結びつくことを人間は求めるべきであると説くのである²⁹⁾。

2-2 神との関係の隔てとなるもの

一方、マイモニデスは「完全な知解を持つ個人で、時おり思念が神から離れる者は、神の配慮はその者が神に思念を置く間だけ存在するのであって、他の事に従事する間は神の配慮は彼から離れ去る」とも述べており、神を知り、悟りを得た者であっても、その者の思いが神と共にない限り、常に神から護りを得られるわけではないと言う。なぜならば、完全な知解を持つ者であっても他のことに従事している間は現実態における知性 ('aql bi-l-fi'l) はなく、知性に近い能力によって (bi-quwwa qarība) 理解しているだけであるからであり³⁰⁾、それは「有能な書記 (al-kātib al-māhir) が何も書いていない」と同じ状態、すなわちその者の知性が働いていない状態に留まるからであると彼は言う。更に彼は「神を拒絶 (idrāb) した場合、彼は神から隠され、またその者から神は隠され、その時全ての悪の攻撃の的 ('urḍa li-kull sharr) になる」とも語っている。なぜならば、神との絆である「知性の流出 (al-faiḍ al-'aqlī)」においてこそ神の配慮と救い (khalāṣ) があるからであり、このため神を拒絶した者には神の庇護が与えられず、神との隔てにおいて悪の攻撃に晒されるからである。だからこそ、神から護りを受けるためには、常に思いを神に向け、神と自身の隔てとなるいかなる障害も取り除かなければならないのである。

マイモニデスは第三部十二章の中でこの世の悪について論じ、個人に降りかかる悪の多くは彼自身の行動に原因があり、全ての病気や問題は人間の欲の結果であると述べているが、五十一章では聖書の「わたしは、わたしの顔を隠す。民は焼き尽くされることになり、多くの災いと苦難に襲われる。その日、民は『これらの災いに襲われるのは、私のうちに神がおら

28) B. T. Baba Bathra, 17a. 'משה ואהרן ומרים ששלושתם מתו בנשיקה' (原文)

29) *Dalāla*, pp. 462-463.

30) バカンは、マイモニデスは能動知性をアリストテレス学派の考えに沿って理解しているが、用語的には中世のプラトン主義者の影響があると述べている。(D. Bakan, D. Merkur, and D. S. Weiss, *op. cit.*, p. 38.)

れないからではないか』と言う」(申命記 31:17)の箇所を引用し、災いと苦難が起きる原因は神にあると民は言うが、神が「顔を隠す (הרת הפנים סה: hastarat ha-panim)」のは我々に原因 (sabab) があるからであり、我々がこの隔て (hijāb) を生む行為者 (fā'ilūn) であると主張する。これが「わたしは (それでも)、その日、必ずわたしの顔を隠す。彼らが (他の神々に向かうことにより) 行ったすべての悪のゆえである³¹⁾」(申命記 31:18) という聖書の言葉の意味であると彼は論じる。すなわち、神の御傍に近付くまでに神と我々の間の妨げとなる障害の多くは我々に因るのであり、神の側に問題があるわけではないとマイモニデスは論じるのである³²⁾。

3 ユダヤ・アラビア語原典におけるヘブライ語——聖書とタルムードの引用を中心に

『迷える者の道案内』の原典はユダヤ・アラビア語で書かれているが、第三部五十一章の 32 箇所の聖書の引用、4 箇所のタルムードの引用、また本章を理解する上で重要な手掛かりとなると思われる 27 の語句 (重複は除く) はヘブライ語で記述されている (表 1 および表 2 参照)。当時、ユダヤ人による科学的小説および哲学的著作はアラビア語で執筆されたが、詩や宗教的事象にはヘブライ語が使われ、ヘブライ語とアラビア語の類義語は相互に自由に交換して用いられた³³⁾。また同一著者が、ムスリムやキリスト教徒を含めた一般社会に伝える場合にはアラビア文字を、ユダヤ人社会に対してはヘブライ文字を用いることもあった³⁴⁾。このように、ユダヤ・アラビア語にはユダヤ的論題を議論するためにユダヤ人社会に訴えるという性質があり³⁵⁾、聖書やタルムード内の語句はその語句が使われる「ある特定の文脈」を読み手が思い浮かべる効果を狙ったものと推察される。以上の点から、ここではマイモニデスが用いたヘブライ語の語句の背

31) カッコ内はマイモニデスの引用にはない。

32) *Dalāla*, pp. 460–461.

33) J. Blau, *op. cit.*, pp. 87, 92.

34) J. Blau. (1965). *The Emergence and Linguistic Background of Judaeo-Arabic: a Study of the Origins of Middle Arabic*. London: Oxford University Press, p. 41. デイヴィッドソンは、ミシュネー・トーラーがヘブライ語で執筆され、本書はユダヤ・アラビア語で書かれた理由として、異なる読者を想定している点と、アラビア語の方が意図の伝達が容易であったであろう点を指摘している。(H. A. Davidson, *op. cit.*, p. 323.)

35) *Ibid.*, p. 129.

景にある筆者の意図を探ることとしたい。

3-1 アラビア語とヘブライ語の併記箇所

第一に、表 1 に挙げた 27 のヘブライ語の語句のうち、アラビア語とヘブライ語の両方で記述されている箇所につき論じたい。それらは全部で三箇所あり、一箇所目は、アラビア語とヘブライ語を併記した箇所で、アラビア語の「法の民である一般民衆 (jumhūr ahl al-sharī'a)」という語句に続き、ヘブライ語で「戒律を順守する地の民 (עמי הארץ העוסקים במצוות: 'amei ha-arets ha-'oskim ba-mitsvot)」と言い換えた所である。二箇所目は、アラビア語の記述をヘブライ語も交えて補足した箇所で、アラビア語で「鼓舞することは常に想像ではなく知的理解 (al-idrākāt al-'aqliyāt) にある」と述べた後で、「想像における思考 (fikr fī al-khayāl) は知識 (דעה: de'ah) とは呼ばれず、(あなた方の) 心に浮かぶこと (העולה על הרוחם: ha-'olah 'al ruḥa-khem)³⁶⁾だからである」と補足的に解釈した箇所である。そして三箇所目は、反対にヘブライ語の単語をアラビア語で補足したところで、ヘブライ語の「愛する人 (אוהב: oheb)」と「熱望する人 (חושק: ḥoshek)」の違いを、アラビア語の「過剰な愛 (ifrāṭ al-maḥabba) が熱情 ('ishq) である」という表現を用いて、補完的に説明した所である。アラビア語とヘブライ語の両方を用いて説明した理由は、日常生活で使うアラビア語と、祈りや礼拝、律法やユダヤ的思考といったユダヤ的な文脈の中で用いられるヘブライ語の二つの言語を用いることで、筆者の意図をより正確に本書の読み手に伝えようとしたからではないかと推察される。

3-2 聖書内の語句の引用箇所

第二に、聖書内の語句であるが、表 2 の 9 語句は聖書テキストに存在するものである。以下の語句以外は本論の他の箇所で言及したため、ここでは残り二つの語句について説明する。一つ目は五十一章の冒頭で、マイモニデスがこの章の目的を「神の特別な真理を知解した者による崇拜を説明し、人間の最終目標 (ghāyat al-insāniya) であるこの崇拜に(読者を)導き、命の袋 (צִרְרוֹר הַחַיִּים: tseror ha-ḥaiim) に至るまで、この世の住処 (hādhihi al-dār) における神の配慮がいかにあるかを教えることである」と述べた所で、この「命の袋」とは、裕福だが評判の悪いナバルの妻、聡

36) エゼキエル 20:32。

明で美しいアビガイルが、ダビデを前にして語った言葉、「人が逆らって立ち、お命をねらって追い迫ってきても、お命はあなたの神、主によって命の袋に収められ、敵の命こそ主によって石投げ紐に仕掛けられ、投げ飛ばされることでございましょう」（サムエル上 25:29）の中にある語句である。トワスキーは「解説者によると、命の袋とは永遠の命のことである」と付記しており³⁷⁾、前述の「人間の最終目標」とは永遠の命、すなわち人がこの世の生を全うした後に受けるべき命であると捉えられ、ここで論じることは「永遠の命」に至るまでの道程についてであると解釈できよう。二つ目は「苦難の歌 (שיר של פגעים: shir shel pega'im)」³⁸⁾で、これは詩編 91 章を指している。マイモニデスは五十一章の中で 3~6 節³⁹⁾、7~8 節⁴⁰⁾、14 節 (既述) を引用しているが、ここで彼は、神が如何に神に依り頼む者の助けであり、護りであるかを語っている。これはユダヤ教の葬儀の際に唱えられる詩でもあり、神の配慮の素晴らしさを讃えた歌なのである。

3-3 タルムードからの引用箇所

第三に、タルムードからの引用箇所について論じたい。以下の三箇所、「これこそが心による礼拝である」、「あなたがたの知覚から神を遠ざけてはならない」、「モーセとアロンとミリアムの三人はキスで死んだ」については既述したため、ここではまだ言及していない「ベン・ゾマはまだ外にいる⁴¹⁾」の解釈について論じたい。マイモニデスは五十一章の中で、王の館の周りを歩く法学者と同じ第四段階にある者として数学と論理学を学ぶ者を挙げているが、それに続き『「ベン・ゾマはまだ外にいる』と言われるように」と追記している。ここで言及されているベン・ゾマ (בן זומא) は、二世紀のタナイーム (תנאים)⁴²⁾の一人で、ラビ・アキバ (רבי עקיבא) と

37) I. Twersky. (1972). *A Maimonides Reader*. Springfield, N.J.: Behrman House, p. 341.

38) B.T. Shevu'ot, 15b.

39) 「神はあなたを救いだしてください、仕掛けられた罠から、陥れる言葉から。神は羽をもってあなたを覆い、翼の下にかばって下さる。神のまことは大盾、小盾。夜、脅かすものをも、昼、飛んでくる夜をも、恐れることはない。暗黒の中を行く疫病も、真昼に襲う病魔も。」(詩編 91:3-6)

40) 「あなたの傍らに一千の人、あなたの右に一万の人が倒れるときすらあなたを襲うことはない。あなたの目が、それを眺めるのみ。神に逆らう者の受ける報いを見ているのみ。」(詩編 91:7-8)

41) B.T. Hagigah, 15a. 'עדיין בן זומא מבחור'

42) ミシュナーに言及された口伝律法の教師のことで、ズゴット (Zugot, 二人組の

同時代の人物である。彼は有名な果樹園 (פרדס: parden) の話⁴³⁾に登場する四人の人物 (ベン・アザイ, ベン・ゾマ, アヘル, ラビ・アキバ) の一人で、「ベン・ゾマを夢で見たら知恵を求めよ⁴⁴⁾」と言われるように有能なユダヤ学者と見なされている。マイモニデスは次の逸話 (אגדה: agadah) から引用している。

「ラビ・イエホシュア (רבי יהושע) が神殿の丘に立っていた。ベン・ゾマは師を見たが立ち上がらなかった。師は彼に言った。『ベン・ゾマ、どこから (来て) どこへ (行くのか) ?』彼は答えた。『上の水と下の水の間⁴⁵⁾を見つめていました。そこには指三本分しかありません。『神の霊が水の面を動いていた⁴⁶⁾』と言われるとおり、鳩が雛の上を触れずに飛ぶようにです。』ラビ・イエホシュアは弟子たちに言った。『ベン・ゾマはまだ外にいる。さて、「神の霊が水の面を動いていた」のはいつだったか。第一日目だ。分かれたのは二日目だ。こう書かれている。「水と水を分けよ⁴⁷⁾。』⁴⁸⁾」

この話の重要な点は、ベン・ゾマは師のそばを通ったにも関わらず敬意を払って立ち上がろうともせず、創造の神秘、すなわち秘義的な話に思いを巡らすことに心を奪われていたという点である。前述した果樹園の逸話の中で、彼について「蜂蜜を見つけたら欲しだけ食べるがよい。しかし食べ過ぎて吐き出すことにならぬように」(箴言 25:16) と書かれているが⁴⁹⁾、蜂蜜は美味ではあるが主食ではないため空腹感を満たすことはでき

意) 世代最後のヒレルとシャンマイのあとの、ヨハナン・ベン・ザッカイからユダ・ハナスイまでの世代を指す。

43) B.T. Hagigah, 14b. 「四人の男が果樹園に入った。ベン・アザイは見て死んだ。ベン・ゾマは見て気が狂った。アヘルは木を伐採した。ラビ・アキバは平安の内に出了。」マイモニデスは第二部三十章で果樹園の話的部分的に引用している。なお、バカンらは、マイモニデスは四人の内ラビ・アキバだけが律法の秘儀に達していたと考えていたと見ている。(D. Bakan, D. Merkur, and D. S. Weiss, *op. cit.*, p. 90.)

44) B.T. Berakoth, 57b. 'הרואה בן זומא בחלום יצפה לחכמה'

45) 創世紀 1:6-7.

46) 創世紀 1:2.

47) 創世紀 1:6.

48) B.T. Hagigah, 15a.

49) この話の解釈としてアナフ・ヨセフ (Anaf Yosef, 19 世紀初頭のユダヤ系ポーランド人) はある逸話を引用している。「ある王が家臣を宮廷の晩餐会に招き、彼らの前にパン、肉料理、ワイン、そしてデザートを振舞った。愚者はデザートをむさぼり、賢者はパ

ない。これらの話から、ベン・ゾマは知恵に満ち、豊富な知識を持つ優れた学者ではあったが、創造の業や戦車の業に関する秘義的な知識⁵⁰⁾を追い求めたため、啓示にある真理を理解しきれておらず、「ベン・ゾマはまだ外にいる」、すなわち、まだ王のいる内庭に入っていないと見なされたのであろう。マイモニデスはこの引用に続き、「自然学を理解すれば館の中に入って回廊を歩き、自然学を習得して形而上学を理解すれば王の内庭へ (אל החצר הפנימית: el he-hatser ha-pnimit) 入る」と書いている。このように、マイモニデスは神に近付くためには学びの順序があり、最初は学問をする上で基本となる数学と論理学を学び、次に創造の業を理解するために必要な自然学を学び、その上で目に見えない神を理解するために必要な形而上学を習得することにより、初めて神に近付くことが出来ると伝えようとしたのではないであろうか。彼は学問の基礎となる知識を習得することなく秘義的な知識を学んでいては神に近付くことは出来ないということ、この「ベン・ゾマはまだ外にいる」というタルムードの言葉を引用することで伝えようとしたと考えるのである。

む す び

マイモニデスは第三部五十一章の目的を、「神の特別な真理を知解した者による崇拜を説明し、人間の最終目標であるこの崇拜に読者を導き、命の袋に至るまで、この世の住処における神の配慮がいかにあるかを教えることである」と述べており、彼が本章で述べることは「命の袋」、すなわち永遠の命に至るまでに人間が辿るべき道程についてであると解釈できよう。彼は譬え話の解釈によって、人間が神との完全な関係に至るまでの過程を七段階に分けて論じているが、最後の神に謁見する段階に到達するためには、まず神に完全に専念して神に近付く努力をし、神との絆である知性 ('aql) を強め、次に神を知解した後に愛をもって心から神を崇拜し、そして常に神に思考を向けなければならないと論ずる。その実践として、シェマーの祈りを唱える時にはあらゆる雑念を取り払って祈り、トラー-

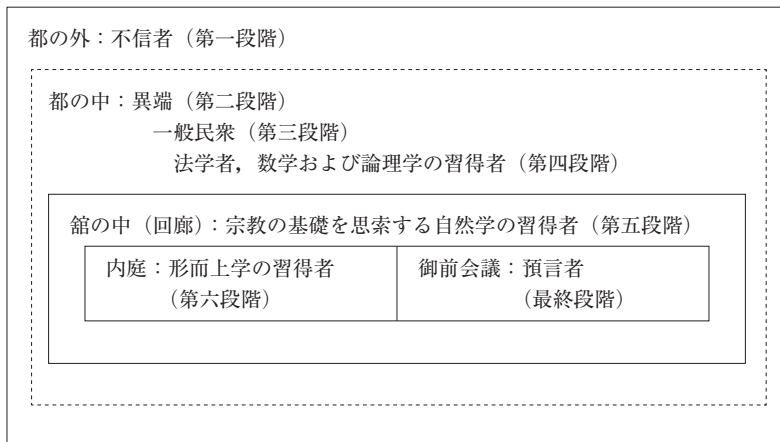
ン、肉、ワインを食した後でデザートを口にした。患者はデザートを食べ過ぎて吐き出し、賢者は満足した。」(R. H. Levin, and F. Wahl eds. (2002). 'Chapter two.' in *Talmud Bavli, Tractate Chagigah*. New York: Mesorah Publications, 14b3, note 29.)

50) ユダヤ教の秘義的学習は、伝統的に創造の業 (Ma'aseh Bereshith) と戦車の業 (Ma'aseh Merkabah) の二つであるとマイモニデスは述べている。また彼は序論で「創造の業は自然学と、戦車の業は形而上学と一致する」と論じている。(D. Bakan, D. Merkur, and D. S. Weiss, *op. cit.*, p. 29.)

を読む時も聞く時も常に思考をその熟考に向け、律法で命じられたことを行う際はその行為に思考を集中するよう弟子に命じる。結論として彼は、人間は知性により神を理解した上で愛する対象である神を熱望し、神と結びつくことを求め、ひたすら神を求めるべきであると主張する。ただし、神を知解し得た者であっても、その者の思いが神と共にない限り神から護りを得られるわけではなく、神から護りを受けるためには思いを常に神に向け、隔てとなる障害を取り除かなければならないと忠告する。

マイモニデスは、神に近付くためには学びの順序があり、最初は学問の基礎となる数学と論理学を、次に可視的な被造物を理解するために自然学を習得し、その上で不可視な世界を扱う形而上学を習得する必要があると論じる。彼は聖書やタルムードから引用することでユダヤ人読者に訴えかけ、学問の基礎的知識を習得することなく秘義的な知識を学んでいては神に近付くことは出来ないということを、「ベン・ゾマはまだ外にいる」というタルムードの言葉を通して弟子に伝えようとしたのである。

(図1) 神に到達するまでの七段階



(表1) 聖書およびタルムードの引用箇所 (引用順)

聖書からの引用 (32箇所)	出エジプト 34:28 (2箇所), エレミヤ 31:3, 申命記 4:35, 申命記 4:39, 詩編 100:3, 申命記 11:13, 歴代上 28:9, エゼキエル 20:32, 詩編 16:8, エレミヤ 12:2, 雅歌 5:2, 出エジプト 24:2, 申命記 5:28, 出エジプト 3:15, レビ 26:42, 創世紀 18:19, イザヤ 59:2, サムエル上 2:9, 申命記 31:17, 申命記 31:18, イザヤ 41:10, イザヤ 43:2, 詩編 118:6, ヨブ 22:21, 詩編 91:3-6, 詩編 91:7-8, 詩編 91:14, 申命記 34:5, 民数記 33:38, 雅歌 1:2, イザヤ 58:8
タルムードからの引用 (4箇所)	B. T. ハギガー, 15a, B. T. タアニート, 2a (J. T. ベラホット, IV), B. T. シャバット, 149a, B. T. パバ・バトラ, 17a

(表2) ヘブライ語の語句

分野	語句 (出典を含む)
法関連 (3)	תורה (Torah: 律法), מצוות (mitsvot: 戒律), ברית (berit: 契約)
儀礼関連 (3)	שמע (shema: シエマーの祈り), ברכות (berakhot: 祝祷), כְּהֻנָּה (khavanah: 意図, 集中)
ユダヤ思想関連 (5)	עמי הארץ העוסקים במצוות ('amei ha-arets ha-'oskim ba-mitsvot: 戒律を順守する一般民衆 (無学者)), אבות (avot: 父祖), חכמים (hakhmamim: 賢者), משה רבנו (Moshe rabe-nu: 我らの師モーセ), יחוד השם (yihud ha-shem: 神の名の唯一性)
聖書およびタルムード内の語句 (9)	אל החיים (tserer ha-ḥaiim: 命の袋) (I サムエル 25:29), אל הפנימיה (el he-ḥatser ha-pnimit: 内庭へ) (エゼキエル 44:21, 27), העולה על רוחכם (ha-'olah 'al ruḥa-khem: あなた方の心に浮ぶこと) (エゼキエル 20:32), הסתרה הפנים (hastarat ha-panim: 顔を隠す) (申命記 31:18), אלהיו בקרבו (elohav be-kirbo: 神は彼と共にいる) (イザヤ 41:10, 43:2 אני אתךの言い換え), שיר של פגעים (shir shel pega'im: 苦難の歌) (B. T. シェブオット, 15b), ידע שמי (yada'a shemi: 神の名を知る) (詩編 91:14), על-פי ה' ('al-pi adonai: 主の口により) (申命記 34:5), מתו בנשיקה (metu be-neshikah: キスで死んだ) (B. T. パバ・バトラ, 17a)
一般語句 (7)	אוהב (oheb: 愛する人), חושק (ḥoshek: 熱望する人), דעה (de'ah: 知識), פסוקים (pesukim: 節), בעולם (ba-'olam: 世界に), מילי דעלמא (mili da'alma: 世俗のこと (آرام語)), נשיקה (neshikah: キス)